

14) シャリンバイ＝車輪梅

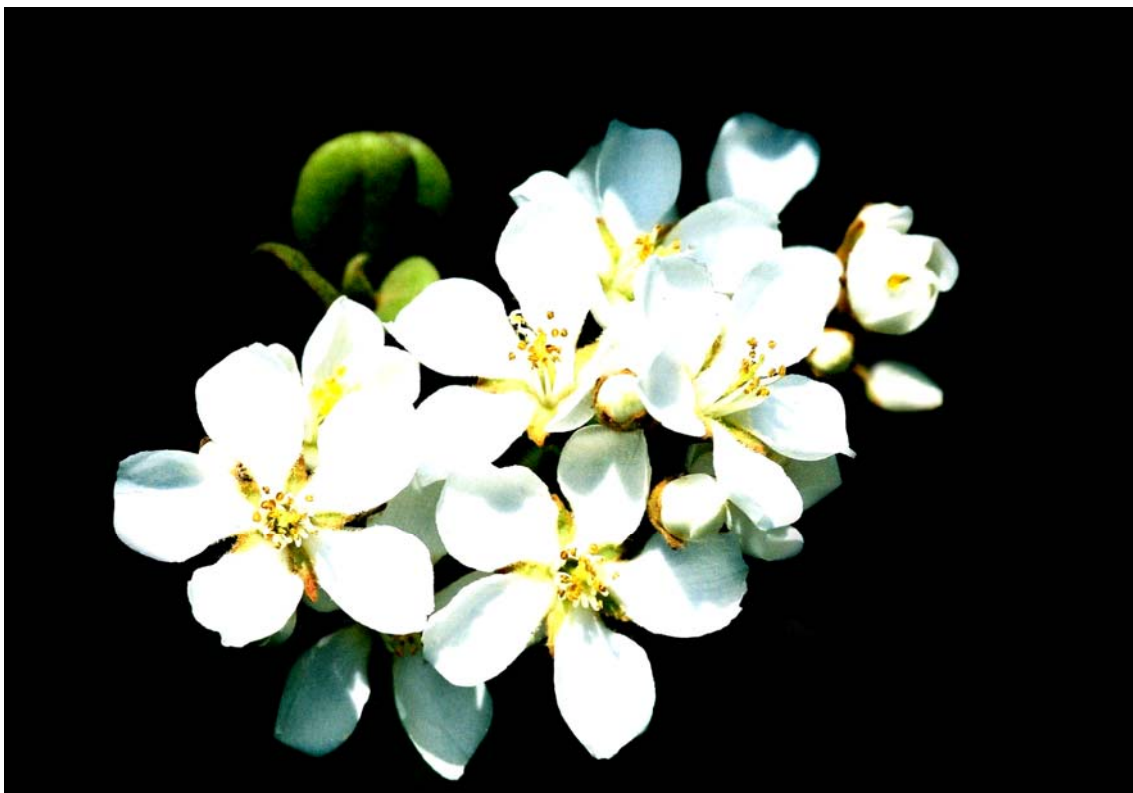
シャリンバイはバラ科の常緑低木で東北地方南部以南の暖地の海岸地帯に普通に見られ、海外では朝鮮半島や台湾などにも分布する。葉は丸みを帯び、暗緑色でツヤはあるものの光沢はない。5～6月に白色の5弁花を開き、秋には黒紫色でツヤのある液果をつける。葉は枝先に輪生状に付き、花の形が梅に似るところから『車輪梅』の名称が与えられた。別名はハマモッコクで、葉や花の形が『木斛』（モッコク）に似ていることに由来する。学名は『*Rhaphiolepis umbellata*』で、属名は「針」と「鱗」との合成語、種小辞は「散形花序」を意味している。

シャリンバイには変種が多く、中でもマルバシャリンバイの葉は全体が円形に近く先端は特に丸くなっている。一方、葉の細長いものにはホソバシャリンバイがあり、葉の厚いものにはアツバシャリンバイが、全体が小ぶりのものにはヒメシャリンバイがある。また花色が紅色のものにはベニバナシャリンバイがあつて、どれもバラ科のなかでは病虫害や乾燥に強い。また厚い葉は潮風にもよく耐える構造になっているため、防砂用、防潮用などに植えられることが多かった。しかし花が美しく、手がかからないところから公園や、路側帯、道路際の植え込みなどに用いられる他、個人の庭などにも植えられるようになった。紅花シャリンバイはよく目立つため、園芸用として庭園などにも植えられている。皇居前広場の路側帯にはベニバナ種が延々と植えられており、花の季節はなかなか見事である。

この木の樹皮や種子、材などにはタンニンを多く含み、材や根を煎じて奄美大島の特産品である大島紬(ツムギ)の染色に使用されている。

大島紬や結城紬などといわれる紬は、いわゆる本繭と呼ばれる美しい楕円形の繭とは異なり、太くて節の多い玉繭(一つの繭の中に二つの蛹が入っている繭)や、変形したくず繭を紡いだ手撚りの玉糸(節のある絹糸のこと)を紬糸として織った布地のことである。機織りの緯線・経線の片方若しくは両方に用いられる。紬糸の太さは手撚りのために均一性を欠き、本繭から作る絹糸を用いた布地よりも品質的には劣る。しかし紬は鈍い独特の光沢を放ち、表面に小さなこぶが生じ、むしろ正絹とは異なった素朴な風合いを出すために好まれた。そして何よりも耐久性に優れ、親、子、孫と何代にわたって着継がれることから、特に下級武士や町人に親しまれた。このため大島紬は、黒砂糖とともに薩摩藩の財政を支える大事な財源であった。結城紬も大島紬も製法は同じだったが、製糸の際に用いるノリが結城紬が『米糊』であったのに対して、大島紬は『海苔』（フノリ）が用いられていた。しかし時代が下ると、手のかかる紬はやがて緋(カスリ)へと変貌し、材質も紬糸から綿や麻へと変化していった。

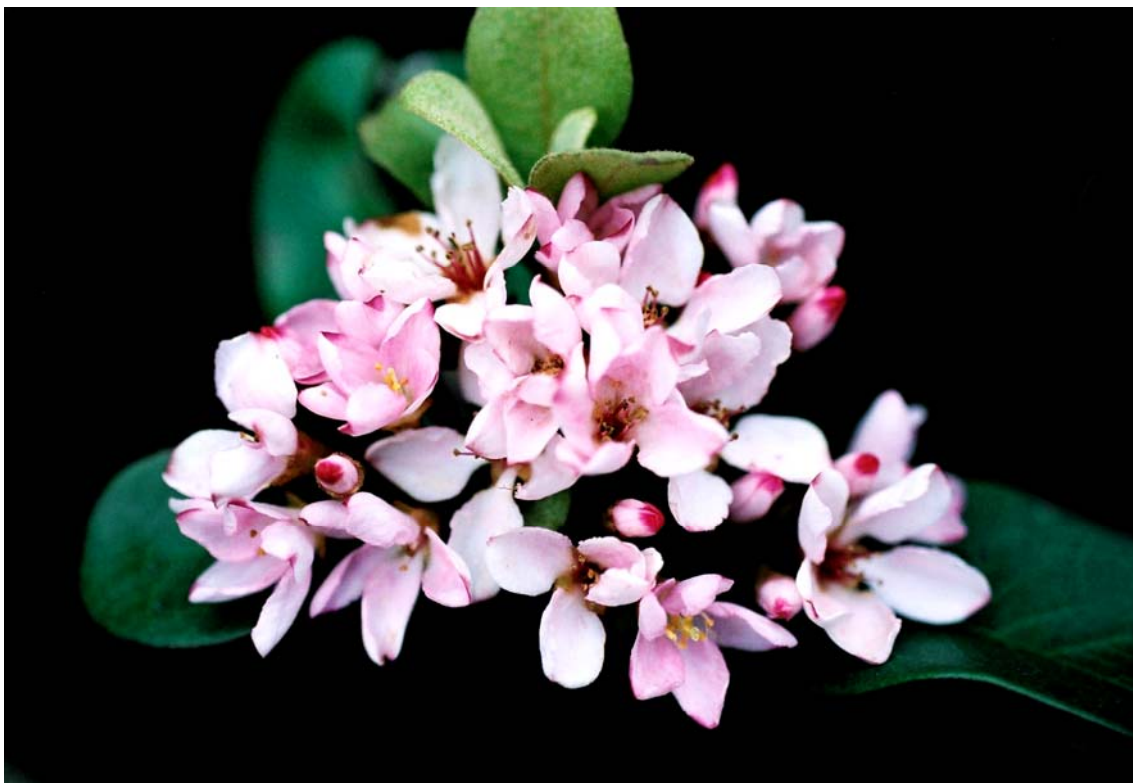
シャリンバイの繁殖は挿し木か実生を行なう。秋に採取して砂地に播種しておくとし翌年に芽を吹くから、その翌年に小鉢に植え広げてあげればよい。高さが30～40cmほどになれば花を咲かせてくれる。



咲き始めたシャリンバイの花は純白で、前種と同様、海岸付近に多く育つ。種子や材にはタンニンが多く含まれ、奄美大島では大島紬の染料に用いていた(東京都千代田区)。



咲いてからしばらく経つと、シャリンバイの花芯は赤褐色になってくる(東京都千代田区)。



紅花シャリンバイの花。皇居前広場の一角に植えられていたものである。道路の反対側には交番があり車を止めたら怒鳴られてしまった。やむなく遠くから歩いた。(東京都千代田区)。



シャリンバイの果実(さいたま市桜区)。

[目次に戻る](#)